

(1)

問一 ㉞ 移送 ㉟ 抑制 ㊱ 膨大 ㊲ 桁 ㊳ 駒

問二 科学技術の進化によって、膨大な電子メモリーに還元され、記憶や思考の機能を人工的に再現、拡張する、生命の有機性を超越した非有機的な不死の身体。

問三 AIの計算がデータの既定の操作でしかないのに対して、人間の思考は、死へと向かい、波立つ情動のリズムの中にあるものだから。

問四 機械との相互浸透が圧倒的に深まり膨大な電子メモリーに還元された不死の人間の非有機性は、かつてのような有機性に内在したのではなく、生命の有機性を超越したものとなっているということ。

(2)

問一 ㉞ えきじゅう ㉟ かんだか(い) ㊱ べんぜつ

㊲ やいん ㊳ ばいしゅう

問二 自分達だけの利益を考えて行動している「彼等二人」とは対照的な、労働者全体の利益のために、外部からの応援者まで得て行動している「他の職工達」。

問三 老年工自身が言った、罷業中に兎にタンポポの葉を食べさせないのは「だが兎が不憫だぞ。まったく不憫だぞ。」という言葉を受けて、結局、タンポポの葉をやりにいこうとした老年工自身がかえって「不憫の極み」になってしまったところにブラックユーモアがある。

問四 人間の様々な思惑に満ちた所業を描いた物語の結末が、「闇のなかにかぶ一ぴきの純白な兎の像」が浮かび上がるさまで結ばれるところに、人間とは無関係に旺盛な生命力を見せる兎との対比によって、人間の滑稽さを示すという意味がある。

(3)

問一 ① 所在なさにぼんやりと物思いにふけり日々を過ごしながら

② 晴らす方法がないもの

③ 以前見た時のようには思われず

④ 手紙を送ることもできない

問二 知人との手紙のやり取りや物語についての話し合いで、手持無沙汰を慰めていたから。

問三 友人との付き合いが途絶えがちで来訪者も少なくなり、人との関係性が変わった。

問四 中宮彰子に親しくお仕えしていた仲間の様子を恋しく思うほどになったこと。

問五 枕草子

(4)

問一 ① あえて ② しか

問二 徳に光り義に富んでいる段干木の立場を、勢に光り財に富んでいる文侯の立場と、たとえ交換しようとしても、段干木は交換に応じるはずもなく、自らの君子の道を貫くということ。

問三 あなたはどうして徳義の高い段干木を軽んじるのか、いや軽んじるべきではない。

問四 天下知らざる莫く、諸侯聞かざる莫し。

問五 段干木が立派な人間であり、文侯に君子として礼遇されていることは天下諸侯の間に知れわたっており、今秦が拳兵して魏を伐とうとすれば、秦が義を持たない国として周囲から見られてしまうという司馬庾の諫めを秦王が受け入れたから。